

# 英語学習における日本語の理解

キーワード: 日本語文法／主語・主題／未知扱い・既知扱い／潜在的「は・が構文」／  
文脈依存・暗示的表現／文脈自立・明示的表現

山本 幸一

## 0. はじめに

舞台の成功には、それを支える裏方の力が必須で、裏方なしの表舞台はあり得ない。英語学習という舞台において、コミュニケーション活動が表舞台とすれば、文法や訳読の学習は裏方と言える。1989年、英語学習指導要領に「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが目標に組み込まれ、英語教育において「コミュニケーション」が重視されるようになるまでは、表舞台も裏方も、文法や訳読の学習であったが、使える英語が身につかないということで、コミュニケーション活動が表舞台に出てきた。しかし、裏方である文法訳読を軽視、排除しては、舞台の成功はおぼつかない。中学校・高等学校の学習指導要領にある「授業は英語で行うことを基本とする」の趣旨は、英語に多く触れることと、英語を使う場を持つことであり、学習者の理解を促し、学習効果を上げるため、場面、状況により、柔軟に、日本語で文法の説明をしたり、日本語を理解させることを否定するものではない。事実、現在の学習指導要領には「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」とされている。

文法訳読や日本語の活用は、省くことのできないプロセス、裏方である。ことばのしくみ、ルールを知識として、トップダウンに(演繹的に文法規則を教えることによって)明示的に学習させるだけでは使えない。「自動化」(意識的に学習した知識が、練習によって膨大な暗示的知識として内在化され、自動的に運用できること)に至らせるために、たくさんの事例に触れ、抽象度の異なるスキーマを抽出して、ルールをボトムアップに(多くの具体的な言語材料に出会うことにより、文法規則を帰納的に抽出することによって)暗示的に体得させることも必要である。つまり、日本での英語学習は、母語話者のように膨大な事例に触れられないので、ボトムアップとトップダウンの両方から進める必要がある。例えば、「3人称単数が主語の場合、動詞にsをつける」というルールを明示的知識として知っているだけではなく、He speak English. ではおかしい、と感じて、He speaks English. として、落ち着くという感覚を養えれば、暗示的知識として習得できたことになる。文法ルールの説明の理解が苦手な生徒には、「話している自分と相手(I, you)以外の人、そして、一人の場合(he, she, it)」等、説明の工夫も重要である。

「授業を英語で行う」という文言を極端に解釈し、日本語で文法を学ばせることや日本語を理解させるプロセスを排除しようとすることは、「善人なおもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや」を、「善人

より悪人の方が救われるのならば、悪いことをした方がいいのだ」と皮相的に解釈するのと似ている。外国語学習を経験したことのない段階では、母語習得のように外国語学習が進むと直感的に受け止めるかも知れない。しかし、経験則と現実とがいつも一致するわけではない。外国語学習に必死に取り組んでみると、その直感が間違っていたと感じて修正することになる。さながら、日常生活において身体経験を通して組み込まれて当然視している古典物理学の法則が、ミクロの世界では成り立たず、量子力学を学習しながら、その直感を修正するのに似ている。本稿では、筆者が、教職課程の学生を指導した際に用いた資料に基づいて、英語学習における日本語の理解について述べる。

### 1. 日本語の理解はなされているのか

澤井(2021)は、高校卒業生の圧倒的多数が英語に苦手意識をもっている大きな原因が、英語と日本語が大きく異なる点を挙げて、日本語と大きく異なる英語の文法項目をいくつか取り上げて解説をしている。また、今井・針生(2014)は、英語学習の躓きとして、次のように述べている。「外国語では通用しないにもかかわらず、身に染みついた母語についての暗黙理の知識を無意識に適用してしまう」そして、この躓きの原因について、次のように述べている。「その言語についてばかりか、自分の母語についても、あまりに無自覚であったためではないかと考えさせられるのである。無自覚に、自分がなじんだ母語の概念で外国語を理解しようとするのではなく、違った基準で概念を切り分ける言語とつきあいながら、自分をとらえている母語の概念枠組みに敏感になることも、実は外国語学習においては重要なことなのではないか。その意味では、母語について言語感覚を磨いておくことが、外国語そのものを学習すること以上に、外国語の学習に貢献する可能性も大いにある」日本語の言語感覚を磨くことが、英語の効果的な習得につながるということである。小松(2012)によれば、「言葉の力と知識を効果的に結びつけるためには、日本語を生かすことが不可欠です。私たちの知識や知恵のほとんどは母国語である日本語によって形作られ醸成されているからです。日本語を生かすことは決して英語力を伸ばすことの障害にはなりません。むしろ相乗効果を持つと私は思います。これは私たち通訳者が日頃経験していることです。日本語を磨くことと英語力を伸ばすことの間には矛盾はありません。」

事実、教室で学生の英語学習の様子を見ても、英語での表現に自信がもてない理由が、英文法の知識に自信がない点にあるのは当然のこと、それに加えて、日本語の理解に欠けていることも大きな理由と考えざるを得ない。例えば、「これ{は/が}彼にもらった本です」と、“This is {a / the} book he gave me.”との対応が理解できない、あるいは、「夏はビールだ」を“Summer is beer.”としてはいけない理由が分からない。これに加え、日本語に見られる文脈依存・暗示的表現を、英語に見られる文脈自立・明示的表現として解釈し直す習慣が身につけていないことも、英語表現力を身につけることに困難を感じる原因と見られる。本稿では、原沢(2012)の言う、実践的で分かり易く、整然とした「日本語文法」を念頭に置くことにする。

こんなエピソードがある。外国人留学生への授業において、「～がありますか?」、「いいえ、～はありません」における「が」と「は」の使い分けについて、教師が、否定文では「は」が用いられると説明をした(「は」の「対比」の意味から、否定文で用いられやすいのは事実ではあるが、必ずそういうわけではない)。その後、「あっ、時間がありません」という表現に接して、学習者が教師の説明に矛盾があると感じる、という笑い話である。日頃、日本語母語話者として不自由なく使っている日本語の係助詞「は」と格助詞「が」についてさえ、学習者への説明は易しいことではない。「花が美しい」と「花は美しい」の意味の違いを、外国人留学生に明確に説明できる学生は多くはいない。

学生の日本語の理解について、「は」、「が」、「を」という助詞に限って見てみよう。まず、(1)(2)の日本語、英語の例文について考えてみよう。

- (1) 太郎がりんごを食べた。
- (1)(b) Taro ate an apple.
- (2) 太郎はりんごが好きだ。
- (2)(b) Taro likes apples.

この日本語の例文から、日本語について、次の疑問が上がる。

疑問1 「～が」も「～は」も同様に主語を表せるのか。

疑問2 「～を」も「～が」も同様に目的語を表せるのか。

しかし、次の(3)(4)から、疑問2は、疑問3に変える必要がある。

- (3) 太郎がりんご(を/\*が)食べた。
- (4) 太郎はりんご(が/\*を)好きだ。

疑問3 対応するのが英語の目的語であるものの、日本語の「～を」と「～が」の違いは?

次に、(5)(6)に見るように、(1)の「～を」、(2)の「～が」の要素を、「～は」として表せることから、「は」の表す意味が「主語」に限られないことが分かり、疑問4が付け加わる。

- (1) 太郎がりんごを食べた。
- (5) りんごは太郎が食べた。
- (2) 太郎はりんごが好きだ。
- (6) りんごは太郎が好きだ。

疑問4 「～は」の表す意味は何か、また、主語を表す「～が」と「～は」の意味の違いは?

結局、「は」、「が」、「を」という助詞について、次の点が疑問であり、学生のほとんどは、説明することができない。

疑問3 対応するのが英語の目的語であるものの、日本語の「～を」と「～が」の違いは？

疑問4 「～は」の表す意味は何か、また、主語を表す「～が」と「～は」の意味の違いは？

日本語が理解できていなければ、日本語で表している内容を英語で的確に表すことは難しい。

## 2. 日本語の理解不足から生じる英語の誤用

英語の誤用について、英語教育が開始する小学校英語を見てみよう。小学校新学習指導要領(第2章外国語)に示されている文型は、次の3文型である。

1. 主語＋動詞

2. 主語＋動詞＋補語

主語＋be 動詞＋名詞(代名詞／形容詞)

3. 主語＋動詞＋目的語

主語＋動詞＋名詞(代名詞)

高嶋(2019)は、次のように述べている。「英語教師は効果的な授業を行うために、英語の言語的特徴や文法上の規則、使い分けなどを深く把握する必要があります。またそれと同時に、日本語を母語とする人に対して英語を教える場合は、日本語についてもよく理解している必要があります。」高嶋は、日英の相違から生じる英語の誤用として、英語初学者に見られる以下の誤用例を取り上げている。( )内が正しい英文である。誤用は、「外国語」で学習する文型(SV, SVC, SVO)に関わっている。

ウサギは耳が長い。	Rabbits are ears are long. (Rabbits have long ears.)
このケーキは私が食べます。	This cake is I eat. (I will eat this cake.)
父は今ロンドンです。	My father is London now. (My father is in London now.)
私はウナギ。(飲食店での注文)	I'm an eel bowl. (I'll have an eel bowl.)
コンニャクは太りません。	Konnyaku will not gain weight. (Konnyaku will not make you gain weight.)

英語の指導者は、このような誤用がなぜ起きるのか、そして、正しい英文に導くにはどのような説明がよいか考える必要がある。高嶋は、それらについての説明の中で、次のような日本語文法概念、用語を用いている。

#### 1. 主語と主題

「が」は主語 (Subject) を表し、「は」は主題 (Topic) を表す。

#### 2. 新情報と旧情報

「が」は新情報を表し、「は」は旧情報を表す。

#### 3. 用いられる文の性質

「が」は見たままの状態を言う文 (現象文) で用いられる

太陽が沈んでいきます。

「は」は性質や特徴など一般的な事柄について述べる文 (判断文) で用いられる

太陽は恒星です。

#### 4. 対象を示す「が」

水が欲しい。ケーキが好きだ。クモが嫌いだ。

高嶋 (2019) の「日本語についてもよく理解している必要」に関連して、畠山 (2014) が、日本語の文法知識の必要性について次のように述べていることも参考になる。

「私たち日本人は、バイリンガルでもない限り、日本語から離れることはできない。日本語で考え、日本語で感じている民族、それが日本人であるのだ。英語で考えたりいきなり英語で書くというのは (よほどの英語の達人でもない限り) 不可能である。日本語を間に挟まない限り、英語で考えたり書いたりすることは (バイリンガルでもない限り、そして簡単な表現でもない限り) できはしない。英作文をしていて、なぜ自分の英作文に自信がもてないかという、自分の英文法の知識に自信がないことと合わせて、日本語の文法の知識が皆無であるからだ。同じく、なぜ英語の先生は学生の質問にストレートに答えることができないかという、それは、英文法の知識が十分でないばかりか、日本語の文法の知識が学生と同程度であるからだ。」この指摘の中で、「日本語の文法の知識が皆無」、「日本語の文法の知識が学生と同程度である」については、人によって必ずしもそうとは言えないものの、日本語の文法について十分な知識があるかと言えば、心許ない点があると一般的に言わざるを得ないであろう。

### 3. 学校文法での日本語の説明

2節でみた、英語の誤用の原因である日本文の説明のため、高嶋が用いた文法概念について、日本の小中学生は理解しているであろうか。中学校で学ぶ学校文法を詳しく解説している田近(2012)の説明を見てみよう。そこでは、格助詞「が」、副助詞「は」について、次のような解説をしている。

「が」 その文節が主語であることを示す。

富士山がきれいだ。 (主体)

これが欲しい。 (対象)

「は」 特に取り出す、強調、繰り返し、題目

私は行きません。 (特に取り出す)

富士山は姿が美しい。 (題目)

2節の高嶋の指摘の1. 2. 3. 4. で見た「は」と「が」の対比は、この学校文法の解説を通してでは、十分な理解が得られ難い。例文にある「富士山(が/は)」の区別は難しい。また、「～が」については、同じ主語であるが、「主体」と「対象」のどちらも表すという事実が示されるだけである。「～が」が同じ主語でありながら、「主体」と「対象」のどちらも表す点について、新国語研究会編(2012)にある練習問題を見てみよう。

「次の「が」はどちらも主語を示す格助詞ですが、それぞれと同じ性質のものを選び」という問題である。正解は、1—ア、2—イである。

1. 花が咲く。

2. ごはんが食べたい。

ア. これは母が編んでくれたセーターだ。

イ. 彼は五カ国語が話せます。

この問題集には、次の解説がある。

2の「が」は希望などの対象を示す「が」で、「を」に近い働きをしています。

英語では、主語: Mt. Fuji is beautiful.、目的語: I see Mt. Fuji. と、明示的に語順で区別している。以上の解説では、英語と違い込み入った日本語の仕組みについて抱くであろう疑問は解決しないであろう。

#### 4. 学校文法と日本語文法

2節で見た日英の相違から生じる英語の誤用について、それらを防ぐための有効な日本文の分析の手がかりが、3節で見たように、学校文法の学習から十分に与えられるわけではない。なぜ、このような状況にあるのであろうか。原沢(2012)は、「学校文法」と「日本語文法」の問題について、次のような趣旨を述べている。

「国文法(あるいは、「学校文法」)」は、日本人が小学校や中学校で学ぶ日本語の文法であり、特別な、日本人のための文法である。他方、「日本語文法」は、外国人が日本語を学ぶための文法であり、両者は基本的な文構造に対する考え方がまったく異なっている。「学校文法」は日本の小学生や中学生対象であり、古典の流れをくむ文法として教えられ、古典との継続性における形式的な分類が重視されていて、言語学的な整合性という観点からは、矛盾点を多く抱え、言語学におかしな体系となっている。他方、「日本語文法」は、日本語を学ぶ外国人対象であり、日本語を理解、使うための道具として、論理的で合理的、言語学的に整合性がある文法体系であり、実践的で分かり易い。英語学習のため、理路整然とした日本語のしくみを知るには、「日本語文法」を学習することが役立つであろう。

#### 5.0 日本語のしくみ

2節で見たような日英語の相違から生じる英語の誤用を防ぐためにも、有効な日本文の分析の手がかりを日本語文法に探りたい。次は、筆者が学生に示している日本語のしくみの資料である。

##### 5.1 日本語のしくみ —日本語文法より—

適切な英語の文が作れないのは、英語に習熟していないからである。しかし、そもそも、英語の文を作る前に、英語で表すための内容、つまり、考えている日本文がきちんと把握されているのであろうか。日頃は、英語のように意識して処理されていない日本語を分析してみよう。以下、[ ] については、適当な方を選びなさい。

##### 日本語の助詞「が」と「は」について

「格助詞」とは、述語との論理的な関係を表す助詞。

「副助詞(係助詞)」とは、取り立てを表す助詞。

(1) 月がきれいです。

日本語の助詞「が」は[ 格助詞 / 副助詞(係助詞) ]である。

(2) 月は地球の衛星です。

日本語の助詞「は」は[ 格助詞 / 副助詞(係助詞) ]である。

#### 「が」と「は」を含む文の性質について

(3) 太陽[ が / は ]沈んでいきます。

[ が / は ]は見たままの状態を言う文(現象文)で用いられる。

(4) 太陽[ が / は ]恒星です。

[ が / は ]は性質や特徴など一般的な事柄について述べる文(判断文)で用いられる。

#### 旧情報(既知扱い)と新情報(未知扱い)について

(5) 「どなたが、山田さんですか？」に答えて

私[ が / は ]山田です。 →「私」は初めて登場

(6) 「みなさんそれぞれ自己紹介をしてください」に答えて

私[ が / は ]山田です。 →「私」は既に登場済み

#### 「が」と「は」のルール

(7) 「が」は、[ 旧情報(既知扱い) / 新情報(未知扱い) ]を表す。

「が」を含む文は、[ 現象文 / 判断文 ]である。

(8) 「は」は、[ 旧情報(既知扱い) / 新情報(未知扱い) ]を表す。

「は」を含む文は、[ 現象文 / 判断文 ]である。

月本(2009)は、「は」と「が」を含む次の文について、外国人日本語学習者に説明が必要であるが、「学校文法」は役に立たないので、「日本語文法」が必要である、と言っている。

山田さんはどなたですか？

\*山田さんがどなたですか？

月本は、『日本語能力試験文法編3級』(松本, 2003)にある次の説明を紹介し、この説明に賛同している。

「は」の文:大切なことは「は」の後にある。

「が」の文:大切なことは「が」の前にある。

この説明における「大切なこと」とは、聞き手にとっての「新情報」と考えられる。

次の英文に対応する日本文を選びなさい。

(9) This is the book he gave me. → this は初めて登場 / the book は既に登場済み

(10) This is a book he gave me. → this は既に登場済み / a book は初めて登場

ア. これは彼にもらった本です。

イ. これが彼にもらった本です。

英文の( )に適切な冠詞を入れ、日本語の助詞との対応を考えなさい。

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

A long, long time ago ( 1 ) old man and ( 2 ) old woman lived in a remote corner of Japan. Every day ( 3 ) man gathered firewood in the mountains and ( 4 ) woman washed clothes in a nearby stream.

主語と主題について

「主語(Subject)」を表す「が」、「主題(Topic)」を表す「は」

「主題」とは、話者が、「話題」として取り上げる要素のことである。

「～が」の機能 → 主語

「～を」の機能 → 目的語

「～は」の機能 → 主題(主語、目的語、修飾語のいずれかを取り出す)

「～が」、「～を」(英語では主語(S)や目的語(O))、修飾語について、主題(T)の「～は」としての前置

	太郎が	部屋を	掃除した	
	S	O	V	
→ 太郎は	( )	部屋を	掃除した	
TS		O	V	TS=TがSを兼ねる
→ 部屋は	太郎が	( )	掃除した	
TO	S		V	TO=TがOを兼ねる

  

	昨日	太郎が	部屋を	掃除した
	M	S	O	V
→ 昨日は	( )	太郎が	部屋を	掃除した
TM		S	O	V

### 対象を示す「が」について

例: 水が欲しい。ケーキが好きだ。へビが嫌いだ。

格助詞「が」は、形容詞、動詞で表す感情等の「対象」を、主語として表す。  
(いずれも英語では目的語として表す場合が多い)

#### ○願望を表す形容詞(欲しい)、動詞+たい

～が欲しい、	～が食べたい、	～が読みたい、	～がしたい
I want it.	I want to eat it.	I want to read it.	I want to do it.

#### ○感情を表す形容詞

～が好き、	～が嫌い
I like her.	I hate him.

#### ○能力や知覚を表す動詞

～が分かる、	～ができる、	～が見える、	～が聞こえる
I understand it.	I can do it.	I see it.	I hear it.

日本語の、対象を表す「～が(主語)」は、なぜ、「～を(目的語)」としないのか？  
「概念」と「文法」を区別して考えてみよう。

○「概念」のレベルと「文法」のレベルは必ずしも対応しない。例えば、主体と主語、対象と目的語が必ずしも対応するとは限らない。

概念 → 主体 対象  
文法 → 主語 目的語

「概念」レベル  
Tom likes Mary.  
(主体) (対象)  
エネルギーの流れ →

「文法」レベル  
Tom likes Mary. → 対応している (主体が主語)  
(主体) (対象)

Mary is liked by Tom. → 対応していない (対象が主語)  
(対象) (主体)

受動態は、平叙文と異なり、概念レベルと文法レベルでの対応が違った構文である。日本語の対象を示す「が」についても同様のことが言える。

対象を表す「が」の、「概念」のレベルと「文法」のレベル

「概念」レベル  
私 好む 花子  
(主体) (対象)

「文法」レベル

私は 花子を 好む → 対応している (主体が主語)  
(主体) (対象)  
(あまり用いられない表現)

私は 花子が 好きだ → 対応していない (対象が主語)  
(主体) (対象)

日本語では、「欲しい」「好き」「分かる」と言った述語の場合、「対象」を「主語」として表す。

りんごが 欲しい。 (りんご → 欲しがられている対象である)

りんごが 好き。 (りんご → 好かれている対象である)

この問題が 分かる。 (この問題 → 理解されている対象である)  
(対象)

この点に関連して、大野(1978)が、「が」の用法の発展について、次のように述べているところが興味深い。

- (11) 君が代、君が為、鈴が音
- (12) …と言ひしことがふびんさに
- (13) 山の方がおぼつかなさ
- (14) 命が惜しかったか
- (15) …など言われることが口惜しい
- (16) 水が飲みたい

歴史的には、(11)のように、「名詞 が 名詞」という形で使われる助詞であった。その後、(12)(13)のように、情意を表す名詞が続いた。更に、(14)(15)のように、情意表現の用言の終止形が来るようになった。そして、現代の(16)が発展してきた、というのである。大野は、これらに共通する性質として次のように述べている。「ガは、その上に新しい情報を持ちこみ、それと一体となって下の体言の形容語・条件句をつくること、つまり未知の情報を加えることに、その歴史を一貫する性格がある」。

## 5.2 「は・が構文」について

日本語の「AはBが～だ／～する」の形式を取る文は、構造の違う異なった種類の文から成っている。この構文を「は・が構文」と呼ぶことにする。まず、「二重が格(二重主語)文」を起源とする文

から見てみよう。

(17) 象が 鼻が 長い(こと)  
S S V

(18) 僕が サッカーが 好き(なこと)  
S S V  
(対応する英語では(SVO))

両文の一番目の主語を、「は」で主題化すると、「は・が構文」の文ができる。

(19) 象は 鼻が 長い  
TS S V  
主体 主体

(20) 僕は サッカーが 好き  
TS S V  
主体 対象

(20)の文の「が」格は、英語では目的語に対応する。I like soccer.

(19)の文を英語にするには、日本文の理解と、英語にするための工夫が必要である。この文は、橋本(1968)の分析を参考に、(21)に示したように、主部・述部が2層に配置された文として捉えると理解し易い。

(21) 象は [ 鼻が 長い ] (1層目)  
主部 述部

鼻が 長い (2層目)  
主部 述部

「は・が構文」の文は、「Bが～だ／～する」部分が慣用表現であるものを含めれば、日本語に頻出しているので、初学者が母語で考えることを英語で表現する場合に備えておく必要がある。(22)の「Bが～だ」は慣用表現である。



特に、潜在的「は・が構文」の場合。

日本語のしくみを活用して、2節で見た、高嶋の取り上げた誤用例について、正しい英文に導く道筋を考えてみよう。次の3つについて、順に検討をして行く。( )内が正しい英文である。

1. 「AはBが～だ／する」

ウサギは耳が長い。 Rabbits are ears are long. (Rabbits have long ears.)  
このケーキは私が食べます。 This cake is I eat. (I will eat this cake.)

2. 「AはCだ」

父は今ロンドンです。 My father is London now. (My father is in London now.)

私はウナギ。(飲食店での注文) I'm an eel bowl. (I'll have an eel bowl.)

3. 「Aは～する」

コンニャクは太りません。 *Konnyaku* will not gain weight.  
(*Konnyaku* will not make you gain weight.)

「AはBが～だ／する」(は・が構文)

「は・が構文」の形式を取る文は、構造の違ういくつかの文から成っている。5節では、次の4つの文をみた。

(25) 象は / 鼻が / 長い  
TS S V  
主体 主体

(26) 僕は / サッカーが / 好き  
TS S V  
主体 対象

(27) 春は / 桜が / きれいだ。  
TM S V

(28) このケーキは / 私が / 食べます。  
TO S V

以降では、「は・が構文」のうち、「二重が格文」から、主体を表す主語が2層に配置された(25)と、修飾語句が主題化された(27)について、英語で表現する場合を考えてみよう。(25)について、英語では主部・述部が2層に配置されることはないので、英語にするにあたって、TSとSのどちらを英語の主語にするのかについて、自然な英語表現になる方を選ぶ必要がある。TSを主語とする場合は、次のように、SVをまとめて概念化して、英語で自然な表現に置き換えられる。

彼は / 歌がうまい。 He is a good singer.  
 彼は / 朝が早い。 He is an early riser.

Sを主語とする場合は、TSを修飾語句とする必要がある。「象は鼻が長い」の場合は、TS, Sのいずれを英語の主語としても表現できる。

象は	/	鼻が	/	長い
TS		S		V
A 「主部」			述部	
B <u>主題</u> /修飾語句		主部		述部

A → 「象は」長い鼻を持つ  
 Elephants have long trunks.  
 B → 象について言えば「鼻が」長い  
 As for elephants, their trunks are long.  
 B → 象の「鼻は」長い  
 Elephants' trunks are long.

「僕は頭が痛い」についても同様である。

僕は	/	頭が	/	痛い
TS		S		V

→ 「僕は」頭痛がある  
 I have a headache.  
 → 僕の「頭は」痛む  
 My head aches. \*My head is painful. (頭は痛みの原因ではないため)

次の文も同様に考えることができる



Cだ」におけるA(主題)とC(キーワード)の関係をA→Cとして示せば、A→Cを明らかにする必要があり、その関係を表す説明を補足する必要がある。Cは、目的語(修飾語句)とするか、「は・が構文」の主語とするかのいずれかの形を取ることが多い。

「AはCだ」 述部を補足

Aは Cを ～する  
TS O V

Aは Cが ～だ  
TM S V

「英国の首都はロンドンだ」では、首都=ロンドンであるので、英文 The capital of the U.K. is London. は正しい。しかし、次では、父=ロンドンではない。

父は今ロンドンです。 \*My father is London now.

A→CにおけるAとCの関係を探れば、説明が必要である。

→ 父は / 補足部分  
TS / 今ロンドンにいます。  
V

従って、対応する英文は My father is in London now.

同様に、次では、私=ウナギではない。

私はウナギ。(飲食店での注文) \*I'm an eel bowl.

説明をして

私はウナギを注文する

→ 私は / 補足部分  
TS O / 注文する/にする  
V  
I'll have an eel bowl.

以上では、「AはCだ」のAが、TSと分析され、Cは目的語(修飾語句)となっている。「は・が構文」を見ると、Aが、TMと分析され、CをSとして落ち着く場合が多い。

春はあけぼの 畠山編(2014) \*Spring is dawn.

→ 春は / 「あけぼのが」 / 一番良い時間だ。  
TM S V

補足部分

In spring, the dawn is the best time in a day.

他の例を見てみよう。

夏はビールだ。 猪野・佐野(2011)

夏は / 「ビールが」 / 最高だ。  
TM S V

Beer is the best friend in summer.

家電製品は秋葉原だ。 猪野・佐野(2011)

家電製品は / 「秋葉原が」 / 最高の販売地だ。  
TM S V

Akihabara is the best place to buy electric appliances.

試合は気合だ。 猪野・佐野(2011)

試合の勝利は / 「気合が」 / 必要だ。  
TM S V

A fighting spirit is necessary to win a game.

You need a fighting spirit to win a game.

花は桜木、人は武士

花は / 「桜が」 / 一番、人は / 「武士が」 / 一番  
TM S V TM S V

The cherry blossom is first among flowers, so is the samurai first among men.

次の文の補足部分を加えた「AはBが～だ」の文のBは「対象」を示している。

明日は心配だ。 \*Tomorrow is anxious.

補足部分  
→ 「私は」 / 明日が / 心配だ  
TS S V  
I feel nervous about tomorrow.

次の例では、英文は日本文の構造から大きく離れている。

牡蠣は広島。

補足部分  
→ 「牡蠣は」 / 広島が / 本場(一番)だ。  
TM S V  
As for oysters, Hiroshima's are the best.  
Oysters produced in Hiroshima are the best.

男は度胸だ。 猪野・佐野(2011)

補足部分  
→ 「男は」 / 度胸が / 一番大事だ。  
TM S V  
Man must have guts.

「Aは～する」

この文では、主部と述部が意味的に結びつかないので、述部と結びつく「～が(S)」を補足する必要がある。

コンニャクは太りません。 \*Konnyaku will not gain weight.

補足部分  
→ 「コンニャクは」 / 食べた人が / 太りません。  
TS S V

この文構造を理解した上で、英語で適切な構文を探すことができる。

*Konnyaku* will not make you gain weight.

## 7. 日本語力の低下

新井(2019)は、次の問題を用いて、中学生に対する調査結果を報告している。

### 問題 1

幕府は、1639年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた。  
1639年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた。

以上の2文は同じ意味でしょうか。

この問題に対する回答で、中学生の正答率は57%に留まった、とされている。文章の趣旨を読み取る以前の短文の意味の理解が不確かである。このような問題が生じている背景には、子どもたちが、日本語の構造、つまり、日本語文法を理解していないことがある。新井(2019)は、次の問題を用いても、一般人に対する調査結果を報告している。

### 問題 2

誰もが、誰かをねたんでいる。  
誰もが、誰かからねたまれている。

以上の2文は同じ意味でしょうか。

この問題に対する回答では、7000人を超える回答者のうち、半数近くが同じ意味であると答え不正解であった、とされている。子どもたちだけでなく、大人も含めた日本人の中には、日本語の構造、つまり、日本語文法を理解していない人がいると考えられる。

次に、それぞれの問題を正解に導けなかった問題点を考えてみよう。問題1については、次の2文、つまり、能動文と受動文の違いが分かっていないことが原因である。

1. 幕府は、大名に沿岸の警備を命じた。
2. 幕府は、大名から沿岸の警備を命じられた。

1の文の受動文は、次のようになるはずで、2ではなく、3こそが1と同じ意味である。

3. 大名は、幕府から沿岸の警備を命じられた。

間違えた回答者は、1の文において、「幕府は」が「主体」で、「大名に」が「対象」である構造を理解していないと考えられる。

問題2については、

4. 誰もが、誰かをねたんでいる。

5. 誰もが、誰かからねたまれている。

4では、「主体」である「誰もが」が、この文脈における想定メンバーを包括的に捉えている。それに対して、5では、「対象」である「誰もが」が、想定メンバーを包括的に捉えている。従って、4、5の文の違いは、次のように、「主体」と「対象」の指示対象が違っていることに起因している。

4の文 「主体」が包括的、「対象」は一部（非包括的）

5の文 「対象」が包括的、「主体」は一部（非包括的）

以上のように見てみると、問題1と問題2について正解に至る上での共通の問題点として、日本語における「主体」と「対象」が、意識的に捉えられていないことが考えられる。英語では、「主体」と「対象」は、語順という1つの方法で示されるが、日本語では、助詞によって示され、それらの助詞が入り組んで使用される複雑さがある。

主体	が、は（主題）
対象	を、が、に、は（主題）

日本語を複雑に見せている特徴とは、対象を表す次のような文において、対象（りんごが）が主語として表現される点である。

6. ぼくは、りんごが好き。

それに加えて、6は、英語にはない2重に主語が置かれる構造となっている。同様に、次のような文も2重に主語が置かれる構造となっている。

7. 象は、鼻が長い。
8. 彼は、顔が広い。

日本語の構造が明確に理解されていなければ、1、3、4、5 の文を英語にすることもできないであろう。

1. 幕府は、大名に沿岸の警備を命じた。
3. 大名は、幕府から沿岸の警備を命じられた。
4. 誰もが、誰かをねたんでいる。
5. 誰もが、誰かからねたまれている。

1. The shogunate ordered daimyos to guard the coast.
3. Daimyos were ordered to guard the coast by the shogunate.
4. Everybody is jealous of someone.
5. Everybody is an object of jealousy from someone.

## 8. 文脈依存・暗示的表現から文脈自立・明示的表現へ

荒木(1994)は、日本語がモノローグ言語であることが、日本人が英語を苦手とする大きな原因であるとしている。モノローグ言語とは、対話においてもほとんど話し相手や他者、環境を意識しない等、対象世界を、情動的、感覚的に未整理のまま切り取る言語のことを指している。荒木の挙げている例をみてみよう。電話で話をしていて、話の展開の中で、自分の弟と代わって話してもらった方がよいと判断した時、日本語では「弟と代わりますから」と言うが、この日本語表現では、「私」も「あなた」も不在である。荒木は、このような表現を英語に直す前に、英語に転換可能な「中間日本語」に直す必要があるとして、1～4のような例を示している。「中間日本語」とは、「外国語に移行可能な程度に最小限度整理された日本語」とされている。日本語の発想そのままでは英語に移行できないため、つなぎ目となる日本語として、論理的に整理した表現を作る訓練が必要である、とされている。

1. 私は、あなたに弟と話してもらいましょう。
2. 私は、あなたに弟と話してほしい。
3. 私の考えでは、弟はあなたと話したいと思います。
4. 多分弟は、あなたと話したいでしょう。

この中間日本語を通して英語に直した1-4をみると、I, you, theyなどがしっかり据えられ論理的な構成が加えられている。

1. I will let you talk to my brother.
2. I want you to talk to my brother.
3. I think my brother wants to talk to you.
4. Perhaps my brother wants to talk to you.

荒木は、川端康成の『雪国』の原文とサイデンステッカーの訳とを対比して、英訳では、状況を論理的に説明する表現が入っていることを示している。

好かないわ

I don't like that way they have.

お帳場で笑ってばかりいて、あんただった

They only laughed down in the office and wouldn't tell me who was here. And it was you.

英語で作文するには、以上見た「中間日本語」に一旦直すことが役立つ。つまり、日本語の「文脈依存・暗示的表現」から、英語の「文脈自立・明示的表現」に移行することである。正しい英文での表現に至る第一歩は、日本文を、文脈独立・明示的表現に直すこと、と言える。これまで検討してきた日本語の各構文の暗示的表現と明示的表現を以下にまとめてみよう。

#### 1. 「AはBが～だ／する」(は・が構文)

(1) 「2重が格文」起源の文の2層構造

Aは	Bが	～だ／する	(1層目)
TS	S	V	
主部		述部	

	Bが	～だ／する	(2層目)
	主部	述部	

#### (2) 修飾語句が主題化された文

Aは	Bが	～だ／する
TM	S	V

## 2. 「AはCだ」 述部を補足

Aは	Cを	～する
TS	O	V

Aは	Cが	～だ	(は・が構文)
TM	S	V	

## 3. 「Aは～する」 主部(X)を補足

Aは	Xが	～する	(は・が構文)
TM	S	V	

形式的には「AはBが～だ／する」の形を取っていないとしても、「AはCだ」も、「Aは～する」も、明示的表現に直すと「は・が構文」に成り得ることが分かる。これらは、潜在的「は・が構文」と呼ぶことができる。日本語には、この構文が多用されている。この構文を踏み台にして英語での表現を考えることができる。

## 9. おわりに

日本人が日本語で考えて英語で表現するのに、日本語の構造や意味が曖昧では英語でのコミュニケーションは心許ないものになる。今井・針生(2014)によれば、「日本語の言語感覚を磨くことが、英語の効果的な習得につながる」。本稿では、英語の初学者が日本語の分析ができていない点が、英語学習の足枷になっているため、日本語と英語の言語間距離の大きさから生じる問題の原因として、「日本語文法」について考察した。日本語のしくみに関係した資料は、筆者が、教職課程の学生を指導した際に用いた資料である。次は、誤用例とその間違えた言い訳(白川, 2002)である。

誤用例:あの人「神様を信じない人達が生きられない」と言いました。

言い訳1、従属節の中の主語は「が」でなければならぬと教わりました。「神様を…生きられない」は従属節です。だから、「人達は」ではなくて「人達が」じゃないのですか。

言い訳2、既に出てきた名詞は「～は」で、初めて出てきた名詞は「～が」だと教わりました。「神様…人達」は、初めて出てくる名詞です。だから、「人達が」になります。

次の「山田さん」についてはどうであろうか。新出であるが、なぜ「は」なのか。

正用例：(部屋に入って来て) すみません。ここに山田さんはいますか？

日本語のしくみを学んだ学生のほとんどは、上記の言い訳の誤りについて、そして、正用例についての説明ができた。野田(1996)は、「は」と「が」の使い分けは、日本語文法の中でも最も難しい問題であり、教育の場で標準として採用されたり、新しい研究の出発点としての「定説」はまだ確立されていない、と書いている。母語でさえこうであれば、自らも英語の外国語学習者でしかない指導者が、英語の文法を説明することの難しさはなおさらである。「文法を学習しても英語は上手にならない。文法学習など必要ない。」という未熟な考えに、英語学習者が唆されることがないように、指導者は言語事実を捉え、学習者のレベルに応じ、手順を追って文法指導を効果的に行うことが必要である。

原沢(2012)が言うように、「言語学的な整合性という観点からは、矛盾点を多く抱え、言語学的にはおかしい体系となっている」のが小学生、中学生が習っている学校文法であるのならば、英語の学習の困難を取り除くために、実践的で、整然とした体系としての「日本語文法」の基礎的知識を身につけさせたいものである。本稿では、小学校で学ぶ「文構造」である SV, SVC, SVO に関連した英語の誤用について、次の3つの問題点を中心に、英語で表現する工夫について考えた。

1. 「～は」が主題化する要素が、「主語」ばかりではなく「目的語」や「修飾語句」でもあり得る点。
2. 「は・が構文」のうち、「二重が格文」を起源とする、主部・述部が2層に配置された文の構造の理解が十分でない点。
3. 「主部」や「述部」が省略されていて、表面的な文が、概念構造を正確に表していないことがある。特に、潜在的「は・が構文」の場合。

「日本人は英語学習に熱心である」とも「日本人は英語に弱い」とも言われる。言葉は「音声」と「概念」のペアであるが、日本人学習者は、「概念」の勉強には熱心だが、「音声」の勉強、訓練が不十分である、ということである。しかし、学生の現状を見れば、「概念」面にも欠けているところがある。英語の文法どころか、日本語の文法も分かっていないと感じることが間々あるからである。この現状では、外国語の学習に必要な、言葉を客体視することができない。以上、本稿を締めくくるにあたり、英語学習における日本語の理解についての本稿の考察が、英語教育の現場に少しでもヒントとなるとすれば、望外の喜びである。

## 謝辞

本稿執筆に当たり、査読委員の先生方には、読み難い拙論を読んで頂き、貴重なご意見を賜りました。また、編集委員の皆様には、いろいろとご配慮を頂き、お世話になりました。厚く御礼申し上げます。尚、当然のことながら、本稿についての責任はすべて筆者にあります。

## 参考文献

- 新井紀子(2019)『AIに負けない子どもを育てる』東洋経済新報社.
- 荒木博之(1994)『日本語が見えると英語もみえる』中央公論社.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク.
- 猪野真理枝・佐野洋(2011)『英作文なんかこわくない日本語の発想でマスターする英文ライティング』東京外国語大学出版会.
- 今井むつみ・針生悦子(2014)『言葉をおぼえるしくみ 母語から外国語まで』筑摩書房.
- 大野晋(1978)『日本語の文法を考える』岩波書店.
- 大野晋(1999)『日本語練習帳』岩波書店.
- 金田一春彦(1988)『日本語(下)』岩波書店.
- 小松達也(2012)『英語で話すヒント 通訳者が教える上達法』岩波書店.
- 澤井康佑(2021)『英文法再入門 10のハードルの飛び越え方』中央公論新社.
- 白川博之(2002)「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』第31巻第4号.大修館書店.
- 新国語研究会編(2012)『くわしい問題集 国文法 中学1～3年』文英堂.
- 菅原克也(2011)『英語と日本語のあいだ』講談社.
- 鈴木渉・佐久間康之・寺沢孝文(2021)『外国語学習での暗示的・明示的知識の役割とは何か』大修館書店.
- 高嶋幸太(2019)『日本語のしくみ』大衆館書店.
- 田近洵一編(2012)『くわしい国文法 中学1～3年』文英堂.
- 月本洋(2009)『日本語は論理的である』講談社.
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版.
- 橋本進吉(1968)『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
- 島山雄二編(2014)『ことばの仕組みから学ぶ和文英訳のコツ』開拓社.
- 原沢伊都夫(2010)『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』スリーエーネットワーク.
- 原沢伊都夫(2012)『日本人のための日本語文法入門』講談社.
- 村田水恵(2007)『入門日本語の文法 日本語を一から学び直したい人へ』アルク.